
冥界

となみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥界

【Nコード】

N5455N

【作者名】

となみ

【あらすじ】

スリを生業としている少女ユリ。いつものように魔石と呼ばれる宝石を盗んだが、それは見たこともなく美しい。なんとなくトラブルに巻き込まれる、そんなヤバイ予感を的中させるように、不思議な青年が姿を現した。

間奏曲は短編形式のサイドストーリーとなっています。

読まなくても本編に支障はありませんが、登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足と思ってください。

章管理に伴いタイトルを変更しました。

後二章で本編は完結です。

その前に再び間奏曲を入れます。

そして最後に外伝としてE p i s o d e 0を載せます。

ちょっと更新が遅れてしまってますが、しばらくお付き合いください。

King ?

雑踏の街の中、軽やかな足取りで進む少女がいた。二十歳になるかならないかの少女は踊るように人ごみを進んでいく。彼女の名前はユリ。スリを生業としている。

しばらく進んでいたが、急に足を止めると、ある建物へ入っていた。

すぐに彼女はまた顔を出した。だがそれは入り口からではなく、いつの間にか建物の屋根に乗っている。

身を屈め、高い所から目下の道を観察している。正確に言えば道ではなく人を観察している。そして重点的に見ているのは、人が持っている荷物。上から仕事に及ぶ相手を物色しているわけだ。

「どうしよっかなあ。あまり良いの持ってるのいないなあ」一人呟く。

そのまましばらく物色していたが、急に彼女の紅い瞳が煌く。そして一目散に建物を降りていった。

「始めて見るほどの大物だわ。って言うか本当に魔石？」心躍らせながら、それでも慎重に獲物に近づいていく。

スリに派手さは禁物だ。相手に気付かれ、覚えられてしまうわけには行かない。だから彼女も服装は至って簡素だ。

容姿は美人だが、肩まできつちりと揃えられた黒髪と紅い瞳がきつく思わせる。特徴的な顔とは言えなくもないが、ある意味どこにでもいそうな普通の少女に見える。

ゆつくりと、だが確実に獲物に近づいていく。そして、相手に気付かれない様そつと腰に下げた袋を頂戴した。

しっかりと手に入れると、小躍りしそうになるのをどうにか堪え、急がず不審に思われない様その場を離れた。

「さてさて」人込み離れたところへ到着してからユリはそう言うのと、そつと袋を覗く。中には宝石が入っていた。それも飛びつきり美しい宝石だ。

丸い形をした手の平に乗る程度の黒い宝石。パツと見黒真珠にも見えるが、その黒は暗くそれでもなぜか透き通って見える。例えるなら、黒い色をした水晶だ。

この世界には異生と呼ばれる生き物がいる。化け物、妖怪、怪物そんな呼び名と同じそれは、人と似た形をしながら、人とは明らかに違う。

その異生が絶え塵となり消えたとき、そこに魔石と呼ばれる石が現れる。異生の核となるそれは、異生それぞれ一つずつ違い、より球体に近く、より濃い色を持つ石の方が、力を持っていた異生の証明と言われている。

「……なんかヤバイ……かも」その宝石を手に取りじつと見つめていたユリは独白した。

その黒く透き通り、形整った宝石を持つ手が震えてきた。こんな魔石は見たことがなかった。

「ヤバイ。絶対ヤバイ！　なんか嫌な予感がする。ヤバイ。ホント怖い感じ……」そう言っ慌てて袋へ戻し、投げ捨てようとして思いとどまる。

「……捨ててもヤバイ気がする……」変な汗がダラダラと流れてきそうだ。袋を持つ手もどうしたらいいのか分からず、固まっている。

「持ち主にそつと返す？　でも持ち主の顔なんて覚えてないよお」
今にも泣き出しそうにユリは袋を持ったままその場に座り込んでしまった。

ユリのヤバイ時の勘はずれた事がない。なんとも言えない不安に駆られ、それを無視すると大抵ろくな事が起きなかった。今まで感じた事の無いほどの不安。初めて感じる恐怖。ここまでのヤバさは覚えが無い。

「どこへ行ったかと思えばこんな所にいたのか」
座り込んでいたユリの背後から男の声が響いた。振り向かなくてもユリに向かって話しかけているのは明らかだった。

ユリは袋を隠しながら立ち上がり振り向く。そして精一杯の笑顔でわざとらしく答えた。

「はい？　誰かと勘違いされてませんか？」虚勢を張ったが、その声は震えてしまった。

頂戴した相手の顔を覚えてはいないが、服装は覚えている。上から下まで真っ黒な衣装。正に目の前にいる男が着ている服だ。

なんでわかったの？　つけられてた訳じゃないのに。ユリは震えながらそう思った。

「ルリ。なんで素直に盗まれた？」男はユリの事など無視して、勝手に話し出した。

ユリにはまったく意味の分からない言葉だ。だが、やはり自分が彼の袋を盗んだ事がばれている様だった。

どうやって言い訳しよう……とユリが思案していると、第三者の

女性の声が割り込んできた。

『……別に。人前では面倒臭いと思ったから』

「……お前らしくないな？」

どこから声が聞こえてくるのかユリには分からなかった。会話をしている男はその相手を見るわけではなく、変わらずユリを見ている。

いや、正確にはユリが隠している袋……中の宝石？

ユリに再び表しようの無い不安が押し寄せる。手も体も震え、心臓が相手に聞こえそうなほど脈打っている。

男を正面から見る事が出来なくなり、ユリは俯いた。今にも恐怖で失神しそうだった。

盗みが見つかってしまったからの恐怖ではない。原因の分からない恐怖。い恐怖。

殺されるかも知れないと言う恐怖でもない。意味の分からない恐怖。だが、その切実さは死に直面するほどの恐怖となんら違いはなかった。

『……波長が……似てたから』

「うん？ ああ、そうだな。言われてみれば似てるか……。容姿も、なんとなく似てるか……」今度はしっかりとユリの顔を見ながら男はそんな事を言った。

『まったく関係なかった。少しでも似てると思った自分が馬鹿だったわ。行きましょう』

「なんだ？ 怒っているのか？ 相変わらずプライドが高いな」そう言う男も相変わらずユリを無視して相手のわからない会話を進め、話しながらユリへ近づいてきた。

「さて、お嬢さん。袋を返して頂こうか」男は極上の笑顔でそう言う。手を差し出す。

ユリは何も言えず、無言で袋を差し出した。その途端安堵する。

咎められ、何か要求されるかも知れない。神殿が国に突き出されるかも知れない。そう言う不安はあったが、先ほどの恐怖からは開放された。

「よしよしお帰り。そして、ルリを盗んだお嬢さんには何か罰を与えなくてはな。だが、どうして俺の袋に魔石が入っている事が分かった？ 魔石を盗んでどうするつもりだ？」

ユリは話すことに一瞬躊躇したが、拒否権はなかった。男の顔はにこやかに笑っているが、その黒い瞳の奥はまったく笑っていない。

また、不安が襲ってくる。慌てて目を逸らしたが、恐怖は離れてくれなかった。

K i n g ?

「ふん。変わった力だな」男 名前をカリストと名乗った は
ユリの隣に腰掛けながら、まじまじとユリを見つめている。

居心地の悪さを感じ、ユリはカリストから少し離れる。
容姿と口調と行動の合わなさにユリは困惑した。

容姿はかなり優男で、顔は整っており美形と言って間違いはない。
町を歩けば十人中九人の女性が振り向くだろうと思われる。正直ユ
リも超好みの顔だ。

口調は横柄で、どこかわざとらしい。無理に偉そうに話している
感じがする。

行動が一番の違和感かも知れない。いや、一番の違和感は口調な
のかも知れないが、とにかく全てが合っていない。

正確には口調だけ合っていない。優男でナンパな感じの行動なの
に、口調は横柄。

これで口調が優しい感じならばじっくり来るのだが……。

「なんだ？」ユリはカリストを凝視していたため、カリストが聞い
てきた。

ユリは慌てて視線を外し、小さい声で答える。

「なんでもないです。……でも……、これから私をどうするのです
か？」一番の疑問。

男の事などはつきり言えば関係ない。自分の身の上が心配だ。

「そうだな。その力……興味がある」そう言ってカリストはユリを

見る。

ユリの変わった力、それは魔石を探知する事が出来る能力だ。どこに魔石を隠していようと、ユリには魔石が光って見える。

服の下だろうと、建物の中であろうと、光って見える。物を透かして光る事などあるのだろうかと思うが、何故かユリには見える。だがそれは決して透視能力などと言うものではなく、魔石限定だ。魔石がある所だけ光って見えるのだ。

色々な町へ行き、色々な人と出会ったが、自分と同じ能力を持つものはいなかった。それどころか、話すと絶対に嘘だと決め付けられ、信用してくれる人は殆どいなかった。

つまりそれほど珍しい能力のようだ。

いつしかユリは人に話すのをやめ、この能力を使って魔石を盗む仕事についてしまった。

人に仇をなす異生。それを倒した証明となる魔石は、国の機関である神殿へ持ち込むと有料で買い取ってくれる。つまり、異生を倒したことによる報酬だ。

ユリも最初の内は盗んだ魔石を神殿に持ち込み、金に換えてもらっていたが、あまり頻繁に持ち込むと不審がられた。

良さそうな魔石を持ち込むと金額も上がるが、良さそうな魔石と言う事は力の強い異生を倒したと言う事だ。ユリにその実力がないことは神殿にすぐばれる。そうすると不審に思われるのは当然だ。

町を変え、神殿を変え、色々な所で稼ぐうちに、ユリはある闇の市場と出会ってしまった。

魔石など神殿でただ浄化してもらっただけと思っていたが、闇の市場の一人に違う使い道がある事を教えてもらった。

魔石コレクターなる金持ちがいる。どんな宝石より妖しく輝く魔石。異生の全てを凝縮したそれを素晴らしいと思う輩はいるようで、神殿の知らない闇で高く取引されていた。

闇の世界に正直躊躇いはあったが、神殿に渡す事に大分限界を感じていたため、手を染めずにはいらなかった。

いつからか得意となり、罪悪感も感じなくなっていた。

その矢先にこの事件だ。自分を恨まずにはいられない。やはり、悪い 後ろめたい 事をしていたつけが回ってきたのか……。ユリは俯きうなだれる。

「神殿には渡さん。しばらく……そうだな俺と行動を共にしてもらおう」

「は？ 何言ってるの？」つい地が出る。
目を見開き驚くユリを気にした様子なくカリストは笑顔だ。

「女は勇ましい方が好みなんだ」

「いや！ そんな事聞いてないわよ！ じゃなくてさっきなんて言ったの……」

「だから、俺と一緒に行動してもらおう」

「はあ？！ 冗談じゃないわよ！ そりゃ、神殿に引き渡されるのは嫌だけど……」

「だったら、俺と来るな？」

次の言葉が出ず、ユリは口を意味なく開け閉めする。

一つ深呼吸してユリは男をにらみ付けた。

「それって脅迫?!」

「かも知れんな。どうするんだ?」

「……わかった……。神殿で捌きを受けるなんて御免だわ。絶対嫌!
それで、私はあなたと一緒に行動してどうしろって言うの」
腹をくくった以上ユリは聞いた。

カリストは少し考える素振りを見せたが、すぐに袋から先程の黒い魔石を取り出し言った。

「これと、似たような魔石を探している……」

King ?

「この町にはないわよ。って言うか、私が行ったどんな町にもなかった……。初めてだったもの、こんなに輝いているのは」ユリはそう言っただけで目を細めた。

カリストは手の平に持っている魔石を見ながら首をひねる。

「とても光っては見えんがな」

「そりゃーね。私にしか見えないんじゃないの？　なぜだかなんて聞かれても困るわよ。私にだってわかんないんだから」

「……波長が似て、容姿が似て……変わった力を持っている……。まさか、な……」魔石を袋にしまいながらカリストはひとり言を言った。

「何？　なんて言ったの？」声が小さくてユリには聞こえなかったようで、怪訝そうにカリストを見ている。

「なんでもない。ちょっとした……考え事だ」そう言ってカリストは首を振ると、そのまま無言になってしまった。

再び居心地悪くなり、ユリも沈黙する。

変な事を言い出され、動揺でいつもの自分に戻って相手とも普通に話していたが、思えば相手のことを何も知らなかった。

何をしているのか。なぜこんな魔石を持っているのか。そしてなぜ魔石を探しているのか。冷静になって考えれば考えるほど、得体の知れない相手だ。

こんなに素晴らしい魔石を持っているのだから、かなりの実力の異生を倒した事になる。と言うかユリが今まで一度も見ただけもないほどの魔石。それを核にしていた異生とはどんなに恐ろしいものか想像も出来ない。

そもそもそんな異生を人の力で倒す事が出来るのか……。

異生を倒す事を職業としているハンターの事をユリは一般の人よりわかってるつもりだ。実際魔石を盗む相手はハンターなのだから。

だから美しい魔石を持っているハンターはやはり隙がなく、ユリでは盗む事が出来ない、と何度も諦めた事もある。

だが、この相手は簡単に盗めた。

盗んだときの状況など、正直あまり覚えてはなかった。獲物に夢中になると、自然と体が動き自然と目的を達成している。いつもそんな状況なので、ユリにどうやって盗んだかと言う明確な記憶はない。

今回は、隙がなく盗めない！　と言う様な危険信号は働かず、あっさりと手中に収めていた。それが魔石を実際に見た途端危険信号が働いたのだが……。

なのでこのカリストと言う男がハンターとしての実力者とは思えなかった。だが、自分の様に他人から魔石を奪ったとも思えない。同業者は見るだけですぐわかる。それもユリの本能的なもので、勘が働くのだ。

魔石を所持しているような輩を相手にしながら、今まで一度も捕まった事がなかったのはその本能的な勘のおかげだった。

「本当、下手打った……なんでかなあ……」心の声がつい実際に口から出る。

慌てて口を押さえてカリストの方を盗み見ると、カリストはしっかりユリの方を見ていた。

ユリの心臓が飛び上がった。急に胸を鷲掴みにされたように苦しくなる。

慌てて目を逸らしたが、カリストの顔が頭から離れてくれなかった。

とても哀しそうで……苦しそうで……泣き出しそうで。でも優しい瞳で……少し笑っていた。

今までの笑顔とは全然違う。今までずっとユリに話しかけるときはすごく笑ってた。楽しそうに、からかう様に……でも奥の見えない冷たそうな目で。

だが先ほどの顔は、瞳は奥が見えて……その奥は優しくて哀しくて切なくて温かい。そんな目だった。

「……取り合えず、場所を変えるか。素晴らしい能力を持った相手とも出会えたし、今回は有意義だった。戻れば簡単に見つかるかも知れないな」ユリはカリストのその声で我に返る。

「も、戻るってどこに？ まさかあなたの家……？」

「……心配するな、取って食いはしない。お前には魔石探しと言う仕事をしてもらう」そう言ったカリストの瞳はいつもの冷たそうな目に戻っていて、それでも笑顔だ。

正直薄気味悪くて、絶対に嫌だ！ と言いたかったが、ユリに拒否権はない。

「……本当に、何もしないわよね？」

「信用ないな？ 心配するな。俺にも好みはある。それほど自分がいい女だと思っっているのか？」

「なっ！？」……そ、そう言うわけじゃないけど、私は女で、あんたは男のわけだし。密室で二人つきりつてのは……」

「なかなか堅いな。面白い。だが問題ない」

「……そこまで言うなら……。でも、もし私に何かしようとしたら……」

「しようとしたら？」

「舌嚙んで死んでやる！」ユリがそう言い切るとカリストは声を出して笑った。軽やかな笑い声だった。瞳の奥も本当に笑っている様だ。

堅い本気の決意を声を出して笑われたのは癪だったが、ユリは少し安心した。

得体の知れない相手ではある。魔石を探している目的も、魔石を所持した経緯もまったく分からない。だが、きっと、悪い人ではない。そんな勘が働いた。

何か、とても哀しい事を抱えている。そしてそれを打破する為必死でいる。そんな勘が働いた。

自慢じゃないが、やはり本能的な勘で人を見る目があったユリは、ちよつとだけ安心した。

「納得した所で、早速飛ぶか」カリストはそう言つと、地面まで届く妖しげな黒いマントを開きユリを抱き寄せる。

「ちょ！」言つた先から！ と文句を言おうと口を開いたが、激し

い衝撃に襲われ、口も目も閉じてしまった。

そして、目を開けた時にはまったく別の場所にいた。

カリストはすぐにユリを放すと目の前にあった簡素な椅子に座る。

「……て、転移するならするって言うてよ！」放された後動けずその場に座り込んでしまったユリは文句を言う。

「言っただろう。飛ぶか、と」

「……………」睨み殺してやりたい。とカリストに明確な殺意をユリはつい向けてしまった。

転移したのは今回でまだ三回目だ。まだ十分に慣れているとは言えない。

転移とはその名の通り、魔法の力で別の所へ移動する事だ。どんなに優れた法使いでも衝撃なく転移する事は出来ない。

その衝撃は痛いわけではない。急激に気圧が変化したような、重力が何倍にもなったような、そんな息苦しさを感じる。慣れれば気にせず転移する事が出来るのだが、慣れていない人にはかなりの衝撃がはしる。

何より自分で転移する場合は身構える事も出来るが、誰かに付いて飛ぶ場合、急だと失神する人もいる。

その為、誰かと一緒に転移する場合は普通相手にしっかりと告知するものだ。

ユリは肩で息をしながら、どうにか整える。そしてうずくまりながらも周囲を見渡した。

家とは思えなかった。ひたすら広い空間。周りには窓も壁らしき

ものさえない。あるのはカリストが座っている椅子だけ。いや、その横に妖しげな姿見が一つ立っている。

明かりが一つも見えないのだが、なぜか暗闇ではない。少し暗い気もするが、日常生活に支障がない程度に明るい。

「……ここどこ？」ユリは考える気も失せ素直に聞いた。

「俺の城だ」

「しろー!？」

「……これから共に魔石を探すパートナーに隠し事はせん。俺はカリスト・ヴィー。リーヴァ一族が一人、13月、冥界の王だ」

「……カリスト・ヴィー……冥界………はあ?!」あまりの告知に何も考えられずユリはただ呆けた。

あまりの出来事だ。あまりの告知だ。先程転移の告知はしっかりとしてくれなかつたくせに、内緒にしておいて欲しい事を今度はしっかりと告知してくれた。

いきなり神様です。しかも冥界の王です。などと言われて反応できる人間がいるはずもなく。それでもちろんユリも例外ではなく反応できず、ただただ無言で呆けたままその場に座り続けた。

広い空間に二人、ひたすら無言の時が過ぎ、ユリがどうにか口に出した言葉は……

「……冗談でしょ？」だけだった。

K i n g ? (後書き)

冥界の王終了です。

冥界シリーズとしてはまだ続きます。

P r e l u d e ？

「休みをやるうか」カリスト・ヴィーが急にそんな事を言い出した。脅迫され、ほぼ無理矢理魔石探しを始めてからもう一年が過ぎていた。その間ずっとカリストの城と言う建物に閉じ込められ、ひたすら姿見を見るか食事をするか寝るか……と言う生活だった。

冥界の王とは言え、リーヴァに頼みごとを 命令を され、断る事が出来るわけもなく、ユリは日々を過ごしていた。

「はい」ユリは素直に頷いた。

カリストが急にこんな事を言い出した訳がなんとなく分かっていたからだ。それにこのチャンスを逃せば次いつ町へ降りられるか分かったものじゃない。

「ルリを貸してやる。好きな所へ行け。……六日間やる」カリストはそう言って袋をユリに渡す。

「え？……」その袋を受け取りながら、ユリは素直に感謝できなかった。

送って、迎えに来てもらう方がいいと思い、その袋を返そうとカリストを見たが、彼の姿はその場にもうなかった。

「……………」

『本人達の意味はまったく無視ね』ユリが無言でいると、女性の声が響き、目の前に二十半ばの漆黒の髪をなびかせた女性が現れる。

「……………ルリア様……………」

リーヴァー族が一人。例外のルリア・ヴィーだ。動植物の女神と言われている彼女がどうして冥界の王と一緒にいるのか分からない。そして何より彼女はカリストとは違い肉体を持たず、黒い魔石の姿をしている。

ユリが一度盗んだ黒い魔石。それはルリアだった。

このカリストの城にいる時だけ、本来の女性の姿を現すが、普段は声だけで魔石の中に閉じこもっている。

正直ユリはルリアが苦手だった。

冥界の王と聞いて、カリストの事もかなり見方が変わったが、それ以上にルリアに対しては最初から恐怖心が強い。

それはたぶんルリアの方がユリを嫌っているからだと思われるが。

「……………」カリストから借りたルリアが入っている袋をどうする事も出来ずにユリが固まっていると、珍しくルリアが笑った。

『行きたい所をいいなさい。付き合っただけから。あいつに今更文句は言えないわ』冥界の王に対してあいつなどと言えるのはきつとこの人しかないだろう……とユリは思っている。

「すいません。実は、ずっとどうしても行きたい所があったのです」ユリは意を決してお願いする。

ユリは孤児だ。両親はまったく知らない。十五歳になるまで孤児院で育った。

人のものを盗んで荒稼ぎをしていたのは、自分が食べるためもあったが、殆どを自分が育った孤児院へ送金していた。

盗みの金だとは当然言っていない。良い所のお宅で働いているか

ら金銭的に余裕があるのだと説明していた。

だが、この一年送金もせず、連絡もしていない。孤児院の母が心配しているはずだ。

ずっと一度帰って説明をしたい、と思っていた。

『

そう……いいわよ。どこ?』妙に優しく、親切なルリアにまた違う恐怖を感じながら、ユリは素直に連れて行ってもらうことにした。

「インシーの町です」

『……インシー……』ユリの言った地名を聞いて、一瞬の内にルリアの表情が変わる。

元々無表情の彼女の、もっと暗い表情を見て、言うてはいけない言葉だったとすぐにユリは思った。だが、すでに口出してしまったし、孤児院があるのはインシーだ。

『プロシード大陸の……インシー?』

「……はい……」

『……』何かを考えているのか、ルリアは黙ってしまった。

ユリから尋ねる事も出来ず、沈黙が流れる。何か因縁のある土地の様だ。ルリアの表情から決していい事があった所ではなさそうだ。『……いい機会ね。どうせ話すつもりだったし……はつきりさせるわ』ルリアは独白すると、固まっているユリの方を見る。

『飛ぶわよ』そう言われ、すぐに転移とわかった。

「は、はい!」ユリは返事をして身構える。

すぐに激しい衝撃を受け、目の前には森が開けていた。

多少回数を重ねたとは言え、やはりまだ転移は慣れない。息切れ

する呼吸を精一杯整え、じつくりと周りを見渡す。

インシーの森だった。

プロシード大陸は縦に長い大陸で、その中心を山脈が大陸を二つにわけるように横断している。そしてその山脈が国境となり、北をノウランク王国。南をサウロンド王国が統治している。

インシーが位置するのは、その南側大陸の丁度中心地点だ。町と湖をすべて囲うように森が開いている。

転移した場所はその森の中、湖近くの大木の前だった。

「インシーの古木……」ユリは懐かしむように木に触れる。

木と言ってもその大きさは半端なものではない。正面から見る限り、それはとても木とは思えなかった。目の前に木の壁がある。上を見上げても葉は見えない。壁が上まで続いている。

遠くから見て初めてその壁は一つの木だとわかる。そのぐらい大きい。

だがユリはすぐにわかった。町からずっと見ていた木だ。御神木と呼ばれ、この町を、森をずっとずっと支えてきた木。

町に住む人間は、町から木を眺め毎日毎日挨拶する。朝はおはよう、昼はこんにちは、夜はおやすみ。

何か素敵な出来事があれば報告し、哀しい事があっても報告する。そんな町の人に愛されている木だ。

ユリも十五歳で孤児院を出るまでは、毎日挨拶をし、色々な報告もしてきた。そして、孤児院の母に内緒で町を出たとき、最後に挨拶したのがこのインシーの古木だ。

「出るとき最後に話して……。帰って来た時最初に話が出るなんて」懐かしさに涙が出そうだ。
木を優しくさすっていると、すぐ隣に人影が写る。

『……まだ生きてたの。しぶといわね』ルリアだった。女性の姿の
ままだ。

ユリが驚きルリアを見ていると、彼女はユリの方を見て笑った。

『この姿でも城を出れるのよ。ただ、他の人に見られると色々面倒臭いから』なるほど納得である。ルリアは明らかに生身とは言えない体だ。

肉体が持つ質量がルリアにはまったく感じられない。地面に脚は付いているものの、浮いているかのように、姿は見えてそこにいるはずなのに線はかすれ、色も薄い。

例えるなら、水辺に映った影のような姿だ。

『私はこのままここにいるから、あなたは用事を済ませてきなさい』ルリアはそう言つと、インシーの古木に沿って歩き出した。

古木の周りを一周するつもりだろうか……。ユリはその慣れた様子を不思議に思いながら、その場を後にした。

『はつきりさせるには最適の場所かも知れないわね……。』ルリアの
その独り言は、ユリの耳には入らなかった

Prelude ?

「ごめんなさい」涙を流して自分を抱きしめる母に、ユリは謝る事しか出来なかった。

音信不通になってしまった事への謝罪じゃなかった。今まで、自分がどうやって生活していたかの事への謝罪だった。

貧しいながら、森に捨てられる子供の面倒を一生懸命見る孤児院の母。人様の物を盗んで良いなどと言う教育をしているわけではない。

金を稼ぐため、母に楽な暮らしをして欲しいがため、その教えを破って盗みを働いていた事への罪悪感が一気に溢れ出していた。

怒られるのを覚悟しつつ、ユリは今までであったことを正直に話した。

泣きながら、それでもしっかりと自分の話を聞いてくれる母に、ユリは何度も何度も謝った。

「ユリ。ごめんね、ごめんね」話をしていると、母の方が謝った。

「自分の子供に生活を心配させるなんて……ひどい母親ね。ごめんね」そう言って何度も謝った。

ユリは嬉しくて仕方なかった。母の気持ち。

孤児院では、兄弟も母もみんな他人だ。血の繋がりは無い。だけど、誰もがみんな思いやり、家族のように大切に思っている。

だが、一人旅に出た後は違った。友達と思っていた人にも裏切られた。自分の為には平気で他人を蹴落とす人たちがいっぱいいた。いつからかユリは血の繋がりがないと信頼できないんだと思うようになっていた。

でも、ここは違う。今孤児院には五人の子供がいて、その子供達みんなが母を思いやり、兄弟を思いやっている。

血の繋がりなんて関係なかった。貧しくても大切なものがここにはある。

そして出て行った後も、娘と思い、心配してくれる母がいる。自分は何なんて馬鹿だったんだろう。

外へ出てお金を稼ぐ事がすべてじゃなかった。ここに留まり、母の助けをするべきだった。

自由にならない身となって初めて、ここでこのまま生活したい。と思った。

「このままここで暮らそう。帰っておいで」そう言ってくれる母が嬉しかった。すぐにその胸に飛び込んでいっぱい泣きたかった。泣いて、また笑いたかった。

でも、今の自分にそれは許されない。

冥界の王カリスト・ヴィーは非情な男だ。死者の神。悪魔……とも言われている。

ユリがカリストに必要とされている事は事実で、信用もされている。だがもし、それを裏切るようなら、何をされるか分からない。

ユリが必要だから、ユリ自身を殺す事はなくても、他者に対してはわからない。それこそ母を人質に取れるかも知れない。そんな事は絶対に嫌だった。

ユリさえ大人しく言う事を聞いていれば、他には何も問題がないのだ。

「お母さん。私ね、好きな人が出来たの。今その人と一緒に住んでいるのよ」口からでまかせだった。他になんて言えば母が納得してくれるか分からなかったからだ。

母はとても驚いたが、すぐに祝福してくれた。

「それじゃ、引き止めるのは酷だね。今度は是非その方と一緒に帰ってきてね」笑顔でそう言う母を見て、涙が零れそうになる。

でも我慢しなくては。自分で招いた事。いつになるか分からないけど、今度は本当に帰ってくるから。そしてその時は、本当に本当の事を話すから。

ユリは精一杯の笑顔で町を後にした。

Prelude ?

「ルリア様。帰ります」しばらく一人で泣き続けた後、それでもユリはインシーの古木の前にいた。

本当ならこのまま逃げ出したかった。でもそんな訳にはいかない。

『早かったわね。泊まってもよかったのよ?』

「いえ、帰ります」泊まってしまうえばもつと母の側にいたくなってしまう。帰りたくなってしまう。

そんなユリの気持ちを察してか、ルリアは笑って提案してきた。

『ここで一泊して行く? すぐに城へ帰るのは嫌でしょう? あいつからは六日間貰っているわけだし』

思わぬ申し出に、ユリは驚愕した。だが嬉しかった。

正直このまま城に帰るのはとっても嫌だった。また、暗く殺風景な空間に閉じ込められるのかと思うと、気が滅入る。

だから、こんな鮮やかな緑の森を見たのは久しぶりで、心も休まった。

『実を言つとね、私も森は好きなの。あの城は……暗くて……苦しいわ。あいつを見てるのも苦しい』

「え?」ユリはまた驚いた。ルリアがそんな風に思っているとは考えた事もなかった。自分と同じように、カリストを見ると苦しいのか……。

『……不思議ね。私も、あいつも……あなたといると嬉しいのよ』

「え！」ユリはもつと驚いた。カリストに嫌われているとは思っていないが、好かれているとも思ってたし、ルリアには絶対に嫌われていると思っていたからだ。

『でもね、それ以上に苦しいの……』

「……………」苦しい？ なぜ？ 閉じ込められ、苦しい思いをしているのは自分のはずなのに……。

『忘れた事なんてないわ。今まで一度だって忘れたことはない。でも、あなたといると、思い出すの。どうしても……深く、深く思い出すの。そして苦しくなる』

ユリは何も言えなかった。ルリアの言っている意味が全然分からない。だが、自分のせいで二人が苦しい思いをしているようだった。そして何より、リーヴァがこんな風に、人間みたいに苦しんでいる事に驚いた。

神様で、すごい力を持っている。それなのになぜ、ルリアは今にも泣き出しそうに、崩れ落ちそうに、弱々しいのか……。

『今日、なぜあいつが急に休みを言い渡したか分かった？』泣き出しそうなルリアは消え、いつものルリアに急に戻った。

「……………」はい……。なんとなく……………」その変化にまた驚きながらも、ユリは返事する。

『あなたを連れてきて丁度一年。その間に全世界を見たわ』やっぱ、とユリは思った。

城に連れて来られてすぐ、仕事内容を知らされた。黒い魔石を探す事。

どうやって探すかと言うと、姿見を見ながら探した。

どう言う仕組みでそうなるのか分からないが、カリストが魔力を込めると、姿見に色々な町の様子が映し出された。

カリストの思惑通り、ユリは姿見を見るだけで魔石を探知する事が出来た。

カリストが町や人を姿見に映し、それをユリが見ながらルリアと同じような光を放つ魔石を探す。そんな日々を一年間過ごしてきた。

『あいつの知りうる世界の隅々を、この一年間ですべて映したのよ』

「……はい……」

『でも……見つからなかった……』

「……はい……」

『一年掛かっているから、確かに人も物も動くかも知れないわ。でも……』

毎日毎日色々な所を見た。少しずつ少しずつ場所を変え、見続けた。だが、目当ての魔石は見つからなかった。

夜寝ている間、少し休憩している間……目当ての魔石が別の所へ移動し、見つけれなかった可能性もある。

だが、そもそもその魔石を人間が所持しているのか？ 所持しているならなぜ神殿に収めないのか？ 所持したまま別の所へ移動したりするものか？ 答えのない疑問ばかりが増えた。

世界各地の神殿内にはルリアの魔力が張り巡らされ、少しでも神殿内に入れば、すぐにルリアに分かるようになっていらい。なので、知らないうちに浄化されたと言う事はないとルリアは言い切

っている。

『……手放してから、一度もその存在を感じた事がないの……』
「……………」探している魔石が何か、ユリにはもう分かっていた。
ルリアがそこまで心痛める理由が分かっていた。だから、分かっているからこそ、何も言えなかった。

『リキは、いつもそう。私を困らせる。いつもいつも困らせて……』
泣いている。ユリはそう思った。でも実際にルリアの瞳からは涙は出ていない。

『あいつの事も……。困らせて、困らせて……』
「ルリア様！」ユリはつい、叫んでいた。何かを言おうと思ったわけではない。ただ、このまま語らせていたらいけない……そう思った。

『……この場所がいけないのかしら……。つまらない事を言っただね。悪かったわ』いつものルリアに戻っていた。

『馬鹿ね。あいつも、私も少し期待しすぎていたの。あなたの能力に』
言わんとしている事がユリはなんとなく分かった。

ユリが探し出してからは一年だ。だがカリストとルリア、二人で世界中を探し続けていた期間は、ユリの想像できる年月ではない事を、ユリは気付いていた。

自分が産まれるよりずっと前、母が産まれるよりずっと前、きつともっともっと昔から、二人は黒い魔石を探し続けていたのだ。

だがユリと出会い、ユリの能力を知って、見つかるかも知れないと言う期待が膨らんだ。期待が膨らみ、それが大きければ大きいほど、反動も大きい。

一年かけて世界中を姿見で見て回り、見つからなかった。その事に二人はともショックを受けていたのだ。

『すぐ見つかるかも知れない……そう思って、あなたの立場を甘く考えていたわ。でも……城の戻れば、あなたにとって長い時をまた三人で、またあの城で過ごす事になる』

「……はい。覚悟……しています」ユリも分かっていた。だからその覚悟も本気だった。

もしかしたら存在しないものを探しているのかも知れない。ないものを見つけることは出来ない。だから、一生……死ぬまで探し続けないといけないかも知れない。そう分かっていた。

だが、逃げる事は出来ない。ならば自分の持てる限りの……全力で見つけ出す。それだけだ。

『……はつきりさせておきたかったの。あなたの立場を。私とあいっはリーヴァー族。あなたはただの人間。この先ずっと同じ城で生活し続けても、馴れ合うつもりはないわ』

「……」急激な厳しい言葉にまた驚いた。正直仲良くなれるのかも知れないと思っていただけに、ユリもショックを受けた。

『あいつは……もう分かてると思うけど、冥界の王なんて言う立場のくせに甘い。あなたの事も気に入って、甘いよ』

最初冥界の王と聞いてすぐに恐怖が浮かんた。リーヴァ一族と言えは恐れ多く、ただの一般人のユリが話せるような相手ではない。その中でもカリスト・ヴィーは異質で、最も恐ろしい神と言われている。

だが、最初の勘通り、一緒に過ごしているうちにそんなに怖くない相手と思うようになっていた。その気持ちを看透かされたような言葉だった。

『あいつに……想いを寄せないで』

「……そんな事……」思ってないと言えは嘘になる。

相手はリーヴァ。冥界の王。好きになどなるはずがない。だが……たまに見せる瞳の奥を覗くと、苦しく切なくなる。

『あいつには花嫁がいるのよ』初めて聞いた話だ。冥界の王に花嫁がいるなど……。

だが、ルリアが言う以上本当の事だろう。そしてその相手はきつと……二人が探し続けている……。

『リキの代わりなんかいないわ。私にとっても、あいつにとっても……。だから、馴れ合わないで……。馴れ合わないわ』

懇願……のように聞こえる。そして戒めか。誰に対しての戒め？

ユリにとって 人にとって リーヴァとは絶対の存在だ。その相手に対して馴れ合う心などユリは持っていない。と言うか持つてはいけないものだ。

多少打ち解けてはいても、神と人は違う。

だから、ルリアにこんな風に言われなくても、ユリの方から決し

て近づくことはなかっただろう。

距離を置いて、自分からは恐れ多く近づかない。優しくされれば嬉しいが、それ以上のことも望んだりはいしない。そうなっていたはずだ。

だが、ルリアに懇願され、リーヴァの二人が自身を戒めている事を知って、ユリは気付いてしまった。

『本当に馬鹿ね。私もあいつも……あなたも……』ルリアが哀しそうにユリを見ている。苦しそうに、それでも愛しそうに。

涙が出ていた。いつの間にかユリの瞳から涙が零れ落ちていた。気付かなければよかった。二人の気持ちに。

探し続けている相手と似た私が現れ、色々な事を苦しんでいる二人の気持ちに、気がつかなければよかった。

そして、自分のカリストに対するこの気持ちに、気がつかなければよかった。

また三人の時間が始まる。暗く広い城で、哀しくって苦しくって嬉しくて楽しくて切ない城で、三人は魔石を探し続ける……。

P r e l u d e ? (後書き)

冥界の前奏曲 P r e l u d e 終了です。
次はサイドストーリー

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (前書き)

短編形式のサイドストーリーです。

本編には直接関係ありませんが、読むと登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足と思ってください。

一人・二人・三人のシーンを色々交差して載せています。

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ?

「何を見ているのですか？」

「……別に……」そう言つて彼は黙る。

いつもそう。私が話しかけても、彼は余計な事を話さない。

私は、私の仕事をするだけ。魔石を探す、その存在。

それ以上でも、それ以下でもない。

彼にとって……。

「ここにもないです……」町の風景が映し出された姿見を見ながら私は言う。

あの時の様な、激しい輝きを放つ魔石を持っている人はいない。

彼を見る。やっぱりあの顔をしている。

一番嫌いな時間。ないと言つた後の彼の顔を見るのが一番嫌。

「今日はもう休め」そう言つて彼は一人になりたがる。

私の存在など無視して、一人の世界へ。

あの人の事を考え、私の事を無視する。

私は無言で自室へ戻る。

本当は慰めたい。

本当は側へ寄つて話しかけたい。

でも、それは彼が許さない。

そして、彼女も、私も許さない。

きつとあの人も許さないだろう。

暗く広い空間。でもそれ以上に私の距離は遠い。
涙が零れる。

どうしたいのか分からない。どうにも出来ない。
もどかしい想いだけが充満する。

暗く広く、哀しい空間。

それでも……私はここにいたい。

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (後書き)

ユリ×カリスト。

I n t e r m e z z o ? A S o l o S c e n e ? (前書き)

ショートボエム系のサイドストーリーです。

本編には直接関係ありませんが、読むと登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足とってください。

一人・二人・三人のシーンを色々交差して載せています。

Intermezzo ? A Solo Scene ?

「探している魔石の……リキア様とはどんな方ですか？」そんな事、声に出して聞けない。

彼にも、彼女にも聞けない。

ルリア様の、双子の妹で喜怒哀楽の女神、リキア・ヴィー。そしてカリスト様の想い人。花嫁……。

一人、この世界を黒い魔石の姿で彷徨っている。

私に似ているというリキア様……。違う、私が似ている。同じように聞こえてその意味は全然違う。

リキア様が先にいて、私は後からの存在。だから、彼から見ても、彼女から見ても、私は私じゃない。

私は、リキア様に似ているユリと言う人間。それだけ……。そして、二人が私を見ると、リキア様を見ている。ユリと言う私を見ているわけじゃない。

「私のこと、どう想っているのですか？」そんな事、声に出して聞けない。

彼にも、彼女にも……。それとも聞けば答えてくれるのかな。

魔石を　リキア様を　探すだけの存在。そう言い切ってくれば少しは気持ちになるのかな。

でも、答えてくれなかったら？

簡単に答えられず、二人を苦しめてしまったら？

私と言う存在が側にいるだけで苦しんでいる二人を、もっと苦しめてしまつたら？

二人を苦しめて、リキア様を思い出させて……。それなのに、リキア様を探し出す事が出来なくて……。

私はなぜ、ここにいるの？

何も役に立たない。二人を苦しめるだけの存在が。

どうしたらいいのかわからない。どうにも出来ない。

彼に、彼女に……カリスト様に、ルリア様に……寄り添いたい。側にいたい。

でも私は人間で、許されることじゃない。

リキア様を探し出さなくては。でも見つけたくない。

見つけたら、私はもういない。二人の側にいられない。

リキア様の代わりなんていない。リキア様の代わりなんて誰もなれない。

でも、身代わりでいいから……私を見ないで、リキア様を見ていていいから、側にいさせてください。

身代わりでいいから、抱きしめて欲しい。優しく話しかけて欲しい。

でも……彼にとっても、彼女にとっても、やっぱりリキア様の代わりなんていない……。

私は、探し出す事も、身代わりになる事も出来ない……。

**I
n
t
e
r
m
e
z
z
o
?
A
S
o
l
o
S
c
e
n
e
?
(後書き)**

このひと言

I n t e r m e z z o ? A T r i o S c e n e ? (前書き)

ショートボエム系のサイドストーリーです。

本編には直接関係ありませんが、読むと登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足と思ってください。

一人・二人・三人のシーンを色々交差して載せています。

I n t e r m e z z o ? A T r i o S c e n e ?

「……ユリはどうだ？」

『……よくないわ……』

「人間には日の光が必要、か……」

『そんな事も気付かなかったなんて……馬鹿ね』

「まったくだ」

「で……えーっと、外に出られてとても嬉しいのですが……なぜお二人まで？」

「気にするな。たまには俺も直に海を見たくなっただけだ」

『気にしないで。私はあの城嫌いなもの』

よくわからないけど……久々に城から出られて嬉しかった。
どこかは知らないけど、目の前には広大な海が広がっている。

気持ちがスーッと軽くなる。

決して病むつもりはなかった。でも、あの暗く広い空間にいと、
自然と体力が落ちていった。

「海は……綺麗だな」

『私は森の方が好きだわ』

真っ黒な二人がこの場所にいるのに、かなり違和感を感じたけど、
嬉しかった。

私の身を案じて連れてきてくれた。

きつと心配して、側にいてくれる。

直接心配の言葉をかけてくれる事はないけど、その気持ちは十分伝わっています。

望んではいけないこと。期待してはいけないこと。
二人の事を想うなら、望んではいけない。

でも、でも今だけは、望ませて……。
この時が、ずっと続けばいいのに……。

このまま、ずっと二人の側にいさせてください。
このままずっと、三人の時が……。ずっと続いて欲しい。

カリスト様、ルリア様……。そしてリキア様。ごめんなさい。
帰ったら、また頑張ります。一生懸命探します。

だけど……。今は、今だけはこの時が止まって欲しい……。
そう望まずにはられない……。

I n t e r m e z z o ? A T r i o S c e n e ? (後書き)

ユリ×カリスト×ルリア

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (前書き)

ショートボエム系のサイドストーリーです。

本編には直接関係ありませんが、読むと登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足とってください。

一人・二人・三人のシーンを色々交差して載せています。

Intermezzo ? A Duet Scene ?

「リキ？」言ってから後悔した。

ここにいる筈がない。いる訳がない。

その名前を口に出すなど、どうかしている。

言われた相手も、肯定する事も否定する事も出来ずに止まっている。

「すまない。ユリ……」

馬鹿だ。

いくら似ているからといって、リキとユリを間違えるなど……。

双子で、姿も声も同じリキとルリを間違えた事もないのに、なぜユリと間違えた。

「あの……今日は……」ああ、町へ降りる日か……。

人間のユリにこの空間は息苦しいのか、たまに体調を崩すときがある。

そうなる前に、なるべく定期的に休みをやっている。今日はその日だ。

「でも！ あの……今日はいいです。明日、お願いします」ユリはそう言つて微笑んだ。

似てない。別人だ。まったく違う。容姿だけならルリの方が似ている。でも……

「リキ……」抱きしめていた。

似てない。別人だ。まったく違う。

代わりになる相手などいない。リキの代わりなどどこにもいない。
でも……

「……リキ……」抱きしめる手に力を入れる。

「違います！」そう言ってユリは俺の手を振り解き、その場から出て行ってしまった。

「……ユリ……」

似てない。別人だ。まったく違う。

リキの代わりなどどこにもいない。そしてユリの代わりだっていない。

馬鹿なことをした……。

「昨日はすいませんでした」

「……………」謝るのは俺の方だ。ひどい、事をした……。

リキの身代わりに、ユリを抱きしめた。
だが、俺が謝るわけにはいかない。

何も言わず、ユリを見つめた。

似てない。別人だ。まったく違う。

それなのに、なぜこんな気持ちになるのだろう。

「……今日は、俺が送ろう」そう言ってユリを引き寄せる。

ユリの体が硬直する。転移の為の硬直？ それとも俺に対する拒否か……。

「飛ぶぞ」ユリを抱きしめたまま転移する。

「帰るときはここで名を呼べ。迎えに来る」

「……はい……」俯いたまま、俺の顔も見ない。
そのまま俺は一人城へ帰った。

馬鹿なことをした。

いつものようにルリを持たせればよかった。

俺と一緒に飛ぶ必要などなかったはずだ。

馬鹿なことをした……。

名を呼ばれば、また迎えに行かなくてはならない。

また、転移するためにユリを抱きしめなければならない。

馬鹿なことをした。

リキの代わりなどいないのに……。ユリの代わりだっていないのに……。

抱きしめたいなどと思うとは……。本当に馬鹿なことだ……。

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (後書き)

カリスト×ユリ

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (前書き)

ショートボエム系のサイドストーリーです。

本編には直接関係ありませんが、読むと登場人物達の心情がわかります。

次話へ行く為の補足と思ってください。

一人・二人・三人のシーンを色々交差して載せています。

Intermezzo ? A Duet Scene ?

「ルリア様？ どうされたのですか？」 ユリが部屋に戻ってきた。
今日の仕事は終わったみたいだ。

『……今日は？』 本当はそんな事聞かなくても分かっている。 もし見
つかっていたら、私に言わないはずない。
無言で首を横に振るユリを見つめた。

全然似てない。

リキは私と同じ顔・同じ声。 鏡を見るかのように相手を見る。

でも、違う。 鏡のように、瓜二つじゃない。
それなのに、どうして似てると思うのかしら。

「……ルリア様？ あの、何か……」 ユリの声で我に返る。
いけない、ここはユリの部屋だった。
用もなく訪れて、長居していい場所じゃない。

『明日は、休みよね。 また私も一緒に行くから』 本当はそんな事ど
うでもいい。

ただ口から出た言葉。

でも、ユリはとっても嬉しそうに微笑んだ。

「はい。 よろしくお願ひします」 そう言って頭を下げる。

全然似てない。

だってリキは素直じゃないもの。 絶対にこんな風に頭を下げたり
しないわ。

私を困らせても、ちょっと舌を出してごまかして、それで終わり。全然似てないわ。それなのに、なんでこんな気持ちになるのかしら……。

『お前……ユリの事好きなの？』肯定するかのようにインシーの古木が揺れる。

『……リキに似てるから……？』返事はなかった。

年を取って、インシーの大木も素直じゃなくなった。昔は、私の言う事を素直に聞いていたのに。

『何？　なんか文句でもあるの？』笑ったかのように葉がまた揺れる。

年を取って、本当可愛くなくなったわね。

でもここ来ると、私の気持ちも少し軽くなる。

あの城は……悔恨の念でいっぱい。

私と、あいつの……。どうにもならない想いがいっぱい充満してる。

「ルリア様。お待たせしました」ユリが帰ってきた。

全部分かっているはずなのに……ユリは強いわ。

私やあいつなんかよりずっと強い。

そっか、そうなんだ。やっと分かった気がした。

私やあいつにない強さ……。リキに似てる。

全然似てないけど、ちょっと似てる。

「あ、あの……ルリア様？」なんで私、抱きしめているのかしら。
ユリは動けないで固まってるわ。

全然似てない。でもちよっと似てるユリ。

私は今、リキじゃなくてユリを抱きしめているのよね……。
『……飛ぶわよ』誤魔化した。

御免ね、ユリ。

リキの代わりじゃないわよ。本当よ。

だけど、あなたを見ながらリキを見ちゃうの。

御免ね、ユリ……。

I n t e r m e z z o ? A D u e t S c e n e ? (後書き)

ルリア
x ユリ

Fantasy ?

薄暗い空間の中、一人の少女が大きな姿見の前にしゃがみ込んでいる。

凝視しすぎないように、それでも少しも見逃さないように真剣な顔で姿見を見ていた。

「え？」その少女 ユリはその瞳に驚愕の色を浮かべる。
視線の先には一人の女性が写っていた。

探している魔石が見つかった訳ではなかった。だがその女性から目が離せない。

漆黒の髪を腰まで流している二十代後半の女性。整いすぎた顔立ちは少し冷たく見える。意志の強そうな漆黒の瞳も、まるでこちらが見えているようにユリの方を見つめていた。

「ル、ルリア様……？」ユリは恐る恐る後ろを振り返る。
すると椅子に座る男もその隣に控えていた女も同じ黒い目を見開いていた。

普段あまり感情を表に出さないようにしている二人が、取り繕うのも忘れ姿見を凝視している。

正確にはその姿見に映ったこちらを見ている女性を……見つめていた。

ルリアが無言のまま頼りなく姿見に近づく。近づけば近づく程その疑惑は確かなものとなっていく。

その姿見に映った女性はルリアとそっくりだった。いや、そっくりなどと言う言葉では物足りない。瓜二つ、そう表現するのが正し

いだろう。

そして三人が無言で見つめる中、その女性はこちらを見つめたまま口を動かした。

音のない映像の中の女性が『あ い に き て』そう口が動いた気がした。

「っ！」派手な音を立ててカリストが立ち上がる。

ユリはその音に誘われ男へ振り向いてから後悔した。その表情は見たくなかった。

その整った顔は歪んでいた。今にも泣き出しそうに、でも嬉しそうに、でも切なそうに……。複雑なその表情はもちろん心も映していたのか、急に姿見から映像が消えた。

「カリー！」ルリアが声を荒げる。今まで見た事もない慌て様にまたユリは心が痛む。

「早く！ 早くまた映して！」いつもは囁く様な澄んだ声がひどく乱れている。

だがカリストはその声に従う事無く立ち竦んでいた。

ルリアの事も見ず、もちろんユリの事も見ず、俯いている。その体からは力が抜け、まるで魂が抜けてしまったかのようなうた。

冥界の王と言う称号を持つ男の姿とはとても思えなかった。

その姿を見てルリアも少し冷静になったのか、いつもの様に表情を改めそつとカリストに近づく。そしてそつとお願いした。

「カリスト。お願い。もう一度見せて。私にはまだどこだか識別できてないわ。今の場所はあなたしか知らない」

そのルリアを見つめ、カリストは再び椅子に座りなおした。だが
姿見は何も映さない。

「カー！」再び焦れたルリアの声がする。
だがカリストは無言で首を振った。

「ありえない。ありえないだろ。向こうからこっちを覗くなんて……
それに俺は何も感じなかった。ルリだって感じてないだろ？
ただ見た目が似てただけだ」

「そうだけど！ そうだけど……あんなにそっくりで……」
二人は同じ様に俯いたまま止まってしまった。

ユリはそんな二人から視線を逸らす。動揺しすぎている二人を直
視出来ない。

いつもの二人とは全然違う。余裕がまったく感じられなかった。

確かに時々余裕なく焦れたような表情や言葉を聴く事はあったが、
それでも普段は堂々と悠々と構えている。それはもちろん神として。

だが今の二人は神々しいなどと言う言葉からは程遠い。歩き回ら
ないだけマシかもしれないが、二人とも視線を合わせようとはしな
いし、落ち着きなく手を動かしていた。

正直、ユリから積極的になる事に躊躇した。でも、ここはなぜか
自分が進めなくてはいけないような義務感に駆られた。

もし探しているリキアだとしても全く違う相手だとしても、この
まま放置しておく事は出来ない。

「……私が……確かめて来ます」ユリのその言葉に二人は弾かれた
様に顔を上げる。

そして二人とも同じような痛みを我慢するかのような顔で見つめてくる。

「カリスト様……送って下さい。直接あの方と私が話して見ます。もしかしたら全く関係のない人かも知れませんが、やっぱり……あの容姿はどう考えても似すぎていると思います」

「……ユリ……」カリストは掠れた声で名を呼ぶ。

ありえない声だった。聞いたことない声。いつもの心地よいバリトンとは違う。

ユリは再び胸が締め付けられたが、精一杯の笑顔で答えて見せた。

「大丈夫です！ 上手にお話ししますから。お二人はまた姿見で様子見て下さい」

「……分かった」カリストは幾分普通の声で返事するとすぐにユリに近づき抱きしめた。

いつもの事とは言えユリの体が強張る。激しい心臓の音がカリストに聞こえてしまいそうで、ユリはつい体に入力してしまうのだ。

「飛ぶぞ」カリストはそう言って転移した。

転移した瞬間ルリアが祈るように手を握っているのが見えた。

Fantasy ? (後書き)

随分お待たせしました。

これから最後までちゃんと更新していけるよう頑張ります。
宜しく願います。

Fantasy ?

そこはピウリンスと言う小さな村だった。ユリの故郷インシーの町と同じ大陸でそう離れていないのに、ユリはこのピウリンスと言う村を知らなかった。

とても温かく何でも地熱があるらしい。その為温かい水が湧き出しているそうだ。

温泉と言われるそれは村から少し離れた所にあつて誰でも入ることが出来るような施設になっていた。だがその事は他の町の人たちには知られていないようで、ピウリンス村は寂びれてもの悲しい村だった。

「……俺は城に戻る」カリストはそう一言つぶやいてまた転移した。飛んできた場所はその温泉がある所の近くだったが、周りに人はいなかった。

「……とりあえず、村に行きます」なんとなく呟いて見る。きつともう二人は自分の行動を姿見で見ている。そう思うとすごく緊張してきた。

いつもカリストが騒がしいのは嫌いだと言うので、姿見に映すのは映像だけだ。けどもちろん音声も拾うことが出来るので、今はきつと言葉も届くだろうと思ったのだ。

もちろん返事はなかったが、ユリは気にせず歩き出した。どうにか補整された道を進むと小さな村が見えてきた。

村の入り口に立っていた一人の男がユリの事を見て驚愕している。

「お、おま、お前何者だ！」かなりどもりながら男はユリを警戒している。

失敗した。どう見ても不審者だ。

姿見を見ていたままの軽装でいきなり転移してしまったので何も持っていない。どう見ても旅人には見えない。

こんな貧相な村に何も持たず現れた女。確実に不審者だ。

「あの、えっと……怪しい者ではなくて……」そのセリフがかなり怪しい。

「お、お前人間か！？ 怪しくないって本当か！？」男の問いかけもどうかと思う。怪しくないと問われ怪しい人ですと答える人間もいないだろう。

平和的な村なのかこう言った急な事に対処できないのか。とにかく男はユリにビビッていた。

ユリは考える。どうするのが得策か……。男を観察するとただの村人、そうとしか見えなかった。

三十代だろう男はくすんだ茶色い髪で、同じような茶色の瞳をしている。

よくよく見れば愛嬌のある顔立ちで、いかにも人の良さそうな雰囲気だ。

ユリは心の中で絶対にカモにするな……と思ってしまった。

「こ、ここには何しに来たんだ？ どうやって来たんだ？」ビビッたままの男を見ながらユリは素直に答える事にした。

「転移して来ました。……その、えつと私が転移できる訳ではないのですが、その……連れは用があつてまた転移して帰りました」とりあえず嘘はいつてない。と言うか全くその通りだ。

「そ、それで何しに来た」

「え？ えー……温泉！ そう温泉があるって聞いて入りに来ました！」ユリはそう言ってから自分で自分の答えに大満足だ。

「そ、そうか！ 温泉はいいぞ！ すぐく体も心も暖まる！」男はそう嬉しそうに言ってから少し余裕が出来たのか、ユリの事を観察しだした。

温泉に入りに来たはずが何も持っていない……。

「お前、誰から温泉の事を聞いたんだ？ 着替えとか何も持っていないのか？」

「え？ え……えー……連れが間違えて持って帰ってしまった困ってたんです！ だから入れなくて、ちよつと村にお邪魔しようかと！」もう本当に我ながらナイスないい訳だ。

「そうか。それは大変だな。よかつたら助けになるぞ」本当に人のいい男だったようで、ユリの言ったことを少しも疑わず信じてくれた。

拳句ユリを助けてくれると言う。

絶対結婚するならこんな人？ でもつまんないかなあ。などとユリはどうでもいい事を考えながら笑顔でうなづく。

「助かります。ありがとうございます」そう言つて男に近づく。

男は少し顔を赤らめながら嬉しそうに頷くと、村へと招き入れてくれた。

「俺の名前はリストバーク。リストと呼んでくれ。お前、名前はなんて言うんだ？」

「ユリです。リストさんは何であんな所にいたんですか？」

「……待ち合わせだ」その質問に今までの明るい雰囲気から一転頂垂れて答える。どうやら聞いてはいけなかったようだ。

「でもきつと今日も来ない。だからいいんだ」そう言ってユリを見て切なさうに微笑んだ。

どうやら待ち合わせ相手は女性のようだ。そして片思いか……振られてしまったのだろうか。

ユリは慌てて話題を変える。

「あ、あの、連れが迎えに来てくれる迄どこかでお世話になりたいのですが……」リストはその言葉に顔を潜める。

「悪いがここに宿は無い。旅人が泊まれる様な所はないんだ」心底済まなさうにリストが言うので、ユリは何も言えなくなってしまった。

いや、だが長居する必要はなかった。あの、例の女性に会ってすぐに確かめてまたすぐに戻ればいい。ユリはそう思いリストに微笑んで見せる。

「いえ、気にしないで下さい。大丈夫です。すぐに迎えに来てくれると思うので」

「へえー。すごいなそんな簡単に転移出来るのか？ それに遠話とあわの法も使えるのか？」遠話とは字の通り遠くで会話する事だ。

だがそれはお互いその法を使えないと会話にはならない。一方的に語っているだけで、相手にその声は届かないのだ。

一方的に相手の事を聞く事を遠耳とおみみと言う法で、相手もその遠耳が使えないと遠話とは言えない。

つまり遠耳の法が使える人達はその法を駆使して会話することを遠話と言う。それと同じように遠視とおしと言う法もある。それも文字通り遠くの事を視る事だ。

カリストが姿見に使っている法はその遠視の進化したものだと思うが、あまり魔法に詳しくないユリはよく分からなかった。

「いえ、私は法を扱えないので……」

「ああ、そうか。俺もだ。だから詳しくないが……呼べば気づいてくれるのもあったか？」リストの言葉にユリは頷く。

なんでも自分の決めた事に対して音や映像を拾う様に出来る法もあるらしく、その法 遠名とおなと言う 法を扱える法使いは殆どの人が自分の名前などを設定しているらしい。

扱える法の力量によってその範囲や効力も色々違って複雑なようだが、以前カリストが自分の名前を呼べば迎えに来ると言った理由はこの法によるものだ。

神様であるはずのカリストが人と同じ法に囚われているのが不思議だったが、人が使っている法は元々神であるリーヴァが作ったと言われているので、同じでもおかしくは無いのかも知れない。

ユリはそんな事を考えながらリストに案内されるがままとある一軒の家へ辿り着いた。

「あの、ここ俺の知り合いの女性の家なんだ。それで、とっても素敵な人だから、きつと助けになってくれるはずだ」リストは赤い顔

でそう言つと、頭をかいている。

例のリストの想い人だろうか。男の態度からバレバレだ。ユリはつい笑つてしまう。男の態度があまりにも微笑ましかったからだ。すっぱかされたにもかかわらずとつても素敵な人と躊躇わず言えるリストがとても輝いて見えた。

「ふふ、本当に好きなんですネ」ついそう言つてしまうと、男は目に見えて慌てだした。

「な、な、何で！……なんでわかつた？」真つ赤になつてどもつたかと思つと、小さな声で聞いてきた。

「だつて、バレバレですよ。顔真つ赤だし」そう言つてユリはくすくす笑つた。

「そうか、バレバレか……。恥ずかしいな。その人はすごく、本当に綺麗な人で、素敵な人なんだ。そう言えば、お前に少し似てるかも知れないな」リストはそう言いながら家のドアをノックする。

ユリはリストのその言葉を受けて固まつた。先ほどの楽しかった気分が冷水を掛けられた思いだ。

男の素直さが微笑ましくてつい和んでいたが、フツとここに来た本当の理由を思い出したのだ。

「アリア。アリア……少しいいか？」ユリの変つた態度に気づきもせずリストはドアを叩き、想い人を呼んだ。

「何ですか？ リストさん。今日はごめんなさい。ちょっと体調が優れなくて」そう言いながら現れた想い人は、ユリの予想通り漆黒の髪を靡かせた美女だつた。

Fantasy ? (後書き)

まだ続きます。思っていたより幻想曲は長くなりそうです……。

Fantasy ?

「……………」

「……………」二人は見つめあったまま何も言えなかった。

カリストに上手に話すと言った以上、どうにか言葉を紡いで会話をしたかったが、実際にその女性を見たらユリの心臓は激しく意思表示しだした。

「アリア、体調悪いのにすまない。この人はユリさんと言って温泉に入りに来たのだが何も持って来ていないらしい。少し相談に乗ってあげてくれないか？」リストはアリアと読んだ女性を嬉しそうに見つめながらそう話しかけた。

「え、あ、ああ。分かりました。私がお相手しますわ。リストさんはどうぞお気になさらないで」アリアはそう言ってリストに微笑む。その笑顔を見てリストはまた真っ赤になると、ユリに後でまた来ると一言声かけて逃げるようにその場を後にした。

ユリは慌ててリストにお礼をいい、またアリアを見つめた。

本当に瓜二つ。ユリはなんとなく似ている程度だが、彼女は違う。本当にそっくりだ。声まで同じ。

話し方を変えれば絶対にルリアだと騙される自信があった。

ユリがとりあえず何かを話そうと口を開いた途端、向こうが先に被せて来た。

「……………」ここでは何ですので、家にどうぞ」そう言って自分はさっさと家へ消える。

出鼻を挫かれユリはつまつたが、すぐにアリアへと続いた。

「……何か飲みます？ ……なんて、私があなたを持て成すなんて可笑しいですね」アリアは台所に立ちながらクスツと笑う。

「……あの……」ユリはそんな女性に何も言えない。

この光景を今二人は見ているのだろうか。会話を聞いているのだろうか。その時二人はどんな顔をしているのだろうか。

ユリは目の前の女性を見つめながら城にいる二人の事を考えていた。

「……まさかあなたがいらつしやるとは思いませんでした。しかも今日の今日で……」椅子に腰掛けたユリの前に飲み物を出しながらアリアはそう言った。

やはりアリアは気づいている。あの時こちらを見ていたのは間違いないようだ。

「可笑しいですね。この日をずっと楽しみに、ずっと待ちわびていたのに……」そう言つて女性は俯いた。

「あの！ あの……やっぱリキア様なんですか？」ユリは意を決して話しかけた。すると女性はその言葉にビックリしたのか漆黒の瞳を見開いている。

「あなた……気づいていないの？」

「え？」今度はユリの方がその言葉に驚いた。

気づいてないとは何をだろう。会話の流れ的に自分は変な事を聞いた覚えはなかったが、女性にとってはかなり意外だったのか、本当に驚いている。

「そう……そうなのね。驚いたわ……」アリアはそう独り言ると、ユリに向かって微笑む。

「そう……許せないわね。こんな想いをしているのに……」そう言った顔は笑っているのに、瞳の奥がユリを睨みつけていた。

「あ、あの……一体……。ごめんなさい、私本当に分からなくて……」

「また視ているのでしょうか？ あなたが迎えに来て」アリアはユリの言葉を無視して虚空を見上げ、強い瞳で睨み付けた。

「リキア様！」その行動にユリはつい叫ぶ。

「私は違うわ！ 私は違う……」ユリの叫び声に負けずアリアは叫び返す。その声は思っていた以上に大きく、はっきとした拒否の言葉だった。

「あの人が迎えに来たら私の分かる事を話すわ。だけど、私……あなたとは一緒にいたくない」そう言って今度は悲しそうにユリを見つめると、ユリが答えるより素早く奥の部屋へと逃げていってしまった。

「……どう言う、事？……」ユリはその場で頭を押さえる。

心臓が激しく脈打っていた。握り締められているかのように苦しい。どうして自分はこんなに動揺しているのだろう。

ある程度覚悟してここに来たはず。相手がどんな態度で来ても動揺しないで自分の仕事 相手に説明すると言う事 をするつもりだった。

それなのに姿を見てからまったくと言って良いほど冷静さが足りない。相手の言うこと、態度に揺さぶられて自分の言葉は何一つ伝えられていなかった。

リキア様じゃない。そしてもちろんルリア様でもない。それなのにあの容姿。そしてこの自分の気持ち……。よく分からなかった。相手の自分に対して言っている言葉も全然分からなかった。ただ自分は何か彼女の癪に障ることをしているらしい。

一方的なそんな責める態度に憤りを感じなくはないが、それ以上に自分の感情を支配しているのはなぜか悲しみ。

初めて会って全然ちゃんと話してもない相手に対して感じるのは可笑しい複雑な気持ち。悔しいような苦しさ。嬉しいような切なさ。悲しいような想い……。こんな感情を自分は知らない。今まで感じたことなど無い。

でも自分のそんな不可解な感情はとりあえず蓋をして先に進まないといけない。でないとここに自分が来た意味が無い。一番自分が冷静でいられるからと思って立候補したのに、これでは本当に意味がなくなってしまう。

ユリは思い切り深呼吸すると、二人へ話しかけた。

「カリスト・ヴィー様。ルリア・ヴィー様。見ていますよね？ どうしたらいいですか？」

「……………」ユリのそのセリフとほぼ同時にルリアが現れた。城の外だが人の姿をとっている。

「隣の部屋にいるのよね……………それなのに、やっぱり何も感じないわ……………」ルリアはそう言って首を振る。

「……………リキア様じゃないって……………言っていました」とりあえず報告する。視ていて知っているとは思うが、他にかけ言葉が見つからなかった。

『……………』無言のルリアに耐え切れず、ユリは肝心の相手の事を聞いた。

「……カリスト様は……」ユリの心は名前を言うだけでも荒れ狂った。苦しい。何て言えば良いのか分からない感情。決して恋をしている、それだけじゃあ済まされない想いだ。

『……反応がない。正直、私もよくここに来れたと思う』ルリアがそういった途端、奥の部屋のドアが開いた。

そこにはもちろんアリアが立っている。

「ルリ……来てくれたのね」そしてそう言って女性は涙を流した。

『……リ、キ？ 違うわよね……』ルリアは震える声で聞いてからすぐに自分で否定する。

「違う。私は違う。でも違っても無い。……私は……」アリアも否定しながら先を進めようとしたが、ユリを視線の端に認めるとその続きの言葉を飲み込んだ。

そして辛そうに微笑む。ルリアにそっくりでありながら、ルリアとは違う表情。

「ちゃんと話します。ちゃんと……。でも……あの人に会いたい」アリアはそう言って虚空を見つめた。

その視線の先にはきつと、カリストがいるのだろう。見つけた時と同じように彼女には姿見の向こうが見えているのだろうか。

ユリはアリアから視線を逸らした。見ていられなかった。本人はリキアとは違うとしっかり言っているが、きつとりキアなのだ。

だからこそカリストに会いたがるのだろう。カリストに……愛しい相手に。

『……………』ルリアが何か言おうと口を開いた途端、第三者の声が割り込んできた。

「アリア、ユリさん、どうなった？　一緒に温泉に行こう」リストはそう言っただけで軽くノックした後、止める間もなく入って来た。そしてそのまま固まる。

「あ、あの…………リストさん…………」ユリは何か言おうと名前を呼んだが、続きが出てこない。リストはルリアを見つめたまま止まっている。

「ア、アリア！　どうしたんだ？　その姿…………」そう言ってからすぐに間違えに気づいた。

「ア、アリアが二人？」リストはそう言いながらアリアとルリアを交互に見比べる。

「…………リ、リストさん…………これは…………」ユリは慌てて言い訳しようと思ったが、いい案が浮かんでこない。

ルリアの姿を見られて出てくる言い訳など無かった。明らかに人とは違う、アリアそっくりな存在。足こそ浮いてはいないが、魔の者とは思えない。

「…………お前、やっぱり怪しいやつだったんだな！」そう言ったりストの目がキラキラと輝いていた。

「アリアを、アリアをどうするつもりなんだ！」ユリを睨みながらリストは叫んだ。その顔は親の敵でも見るように憎しみで歪んでいる。

先程までユリに向けていた優しそうな笑顔はどこにもなかった。

「リストさん…………」ユリはそんなリストを見て唇を強く噛み締める。そうだ、もしアリアがリキアならば、ここから連れ去ってしまうの

だ。

どう言い訳した所で、連れ去って存在を消し去って……。リストの想いは成就する事はない。

「リストさん。大丈夫です。この人達は私の知り合いなのです」アリアはそんな睨みあう二人の間に入ると、リストへ微笑んでみせる。「ごめんなさい。温泉へは行けません」そしてそう断りを入れるとそつと外へ誘導する。

「ア、アリア！ 俺は……君を……」

「リストさん！ ごめんなさい。また……また、今度お話ししましょう。ごめんなさい……」アリアはリストが何か言いかけたのを自分の言葉で塞ぐと、そのまま外へと追いやってしまった。

外でリストが何か叫んだが、アリアは聞こえないフリをしてドアに鍵を閉める。

「うっかりしてましたね……。このまま、知らないまま終わらせたかったのに……」そう言ったアリアの漆黒の瞳は揺れている。

艶やか瞳がより潤み、そこから一筋の涙が零れた。

「っ！」ユリは心が締め付けられた。アリアの心が流れて来たみたいに、リストに対する想いが溢れて来た。

愛しい相手。優しくて優しくて、自分を大切にしてくれる存在。ちよっとおっちょこちょいで、人が良すぎるくらい良すぎて。すぐ誰の事も信じてしまう。

素直で、正直で真っ直ぐで。こんな私にも惜しめない愛情を捧げてくれる相手。

こんな、存在が意味のない私の事を、真っ直ぐに見てくれる、唯

一の人。その想いに答えたくて、答えたくてたまらないのに、答えることは出来ない。

なぜなら私は、意味の無い存在。……私は……

「やめて！」その叫び声と同時にユリは頬に衝撃を受ける。その衝撃で現実に戻され、左頬がジンジンと痛みを帯びてくる。

呆然と打たれた頬を押さえながら、打った相手を見つめた。

「だから、だからあなたと一緒にいるのはいやだったの！ 共有しないで！ やめて！ それは私だけの想いよ！ リキアじゃない。ただの人として、ただのアリアとして26年間生きて来た私の想いよ！ あなたなんか感じて欲しくない！」アリアは泣きながらそう叫ぶと家を飛び出していった。

ユリは打たせた頬を押さえながら微動たに出来なかった。先程まで感じていたリストへの想いに心引き千切られそうだった。

苦しくてたまらない。愛しいのに答えられない。それなのにその手を離せない。中途半端な態度を取って相手を傷つけている事はわかってるけど、彼から与えられる心地よい想いを失くしたくない。

自分は意味のない存在なのに。彼の幸せを想うならすぐにでも離れなくちゃいけないのに、自分勝手な感情で手離したくない。

なんて浅ましい。なんて汚らしい。なんて利己的で自分勝手な感情。彼の事が好きで……好きで止められない。

ユリはそのまま泣き崩れる。自分の感情じゃ無い事は分かっている。それなのに引き摺られる。こんな想い知らない。

自分の想いじゃないのに、本当は自分がリストを愛しくて愛しくて堪らないかのように錯覚する。

『ユリ、どうしたの……しっかりして、何があったの?』しゃがんで悲鳴を上げるように泣き崩れているユリにそっと触れると、ルリアは背中を摩る。

「なんで、な、なんで……わ、私……関係ない、のに……」しゃくりあげながらどうにか言葉にすると、ルリアを見つめる。

その漆黒の瞳を覗き込むとまた感情が溢れて来る。大好き、大好き。大好きなルリア。ごめんね、ごめんね。私知らなくて。ルリアが苦しんでるなんて知らなくて。気づかなくて、苦しめて。

ごめんね、ごめんね。それなのにまた私は傷つけた。私はこんなに傍にいるのに……。

「う、ううー」泣きながらユリはルリアに抱きついた。誰の感情か分からない。

アリアの? リキアの? ……それでも自分の?

分からなかった。自分の感情がぐちゃぐちゃで、誰かの感情がぐちゃぐちゃで。とにかくよく分からなかったけど、泣くしかなかった。

ユリはよく分からないままルリアに抱きつき泣き続けた。声が枯れるほど、羞恥心なんてどこかに置き忘れて、とにかく叫びながら泣き続けた。

Fantasy ?

薄暗い空間の中、一人の男が椅子に座って姿見を覗いている。目まぐるしく変わる姿見の映像は、今は漆黒の髪をなびかせ走っている女性を追っていた。

口元を手で抑え足早にどこかへ向かっている。

見つめる男 カリストは思案する。冥界の王らしく怖いものなどない、と言い切り強気に出れば良いものの、カリストは出来ない。特に彼女達に対しては自分がまったくのただの男に戻ってしまうことを知っていた。

カリストは瞑目すると、先程見ていたユリの事を思った。なぜかアリアの心と同調したのか、感情に流され泣き崩れていた。その姿を見て、カリストは唇を噛み締めていた。

ユリに、リキアとは違って心惹かれている自分がいてカリストは動けずにいた。

どうかしている。リキアとは違う相手を想うなんて。ありえない事だ。それなのに、どうしてもユリの事が気になってします。

「……………」カリストは何度目か分からないため息をつく。
リキアを迎えに行きたい。本人は違うと言っていたが、アリアはリキアなのだろう。リキアの気配を感じなくても、きっとリキアなのだ。

だから迎えに行きたい。でもなぜか迎えに行けない。リキアと確信が持てない為なのかユリの事が心の奥底に燦っているせいなのか分からないが、なぜか足が動かなかった。

アリアの波長は確かにリキアに少し似ている。ユリに感じるのと同じくらいには感じる。だがあのそっくりな容姿に対してでは物足りなく感じる。

そう足りないのだ。決定的に何か足りない。

容姿だけなら完璧だ。だが他の部分が何か足りない。それはリキアとしての心なのか分からないが、確かに不足している。

アリア本人も言っていた。自分は違うと。でも違くもないとも言っていた。つまり、そう言う事が……。

「……………」カリストは無言のまま立ち上がった。

姿見はいつの間にか立ち止まりひざを抱え座り込んでいる女性を変わず映している。

カリストはその姿を見つめると、そこへ転移するべく神経を集中する。大した気力も必要とせず男は転移した。

大昔は飛ぶ事一つでも大変な集中力を必要としたのに……今の自分は莫大な力を持っていてあつけない。

過去を振り返るなど馬鹿な事を。

カリストは見つめてくる女性を目の前に不要な思いは遮断し、向き合うことに決めた。

「カリ……スト……」震える声でアリアは名を呼ぶと、その漆黒の瞳から大粒の涙を流す。

先程とは違ってその光る雫は止め処なく溢れて来る。

「リキ？……やはり違うか。足りないのだな」ルリアと同じ様に確認してからすぐに自分で否定する。

彼女からは愛しい女性の気配を感じることは出来なかった。そして自分の憶測に確証を得る。

「待つてました。待つて、ました……迎えに来て下さるのを……」
涙を拭きながらそう言うのと、カリストの手をそつと取る。

カリストはそのまま動かず好きにさせる。

「もうきつと……分かっていきますよ、ね？ 私は、そう……器です……」
「アリアはそつとつかんだカリストの右手に口付けをするのかの様に頬を寄せる。

そして愛おしそうに摺り寄せ、吐息を吐く。

「何も、言わずに連れて行つてください。あなたの城に……。私は……アリアは、もう存在しません。存在する必要はないのです」
そう言うアリアは寄せていた顔を上げ、カリストを見つめる。
その瞳は嬉しいけれど、悲しい。そう潤んでいる。

「あの男はいいのか？」聞かないでおこうと思っていた。だがその悲しい想いを目の奥に感じてしまった以上問いが口に出ていた。
「……あなたに言われるなんて思わなかったわ。時間が経って……大人になった？」アリアはフワツと笑うとそう言った。

「元々何も言わずにいなくなるつもりだったのです。ちょっと計画が狂いましたが、いいんです。私達は他人だから……いなくなつても……大、丈夫……」

「……残つてもいいぞ」カリストの口からなぜだかそんな言葉が出てきてしまった。アリアが涙を引っ込め驚愕の顔で見つめてきている。

「今までたくさん待つた。これから少しぐらい伸びても関係ない。

……不足しているものを、見つけるまで、アリアとして……」
「カーリー！」愛称を言われカリストの口が止まる。

「それは、そんな事はリキアとしての私が許さないわ。絶対に許せない。私はアリアだけど、リキアの器だけど、リキアとしての想いも覚えているの。忘れられないのよ……」

「……………」カリストは顔を覆って再び泣き出したアリアに何も言えなくなってしまった。

正直アリアにどう接して良いのか分からない。リキアだけどリキアじゃない。

彼女だけいても、自分の心は満たされない……。不完全なリキアならばいなくてもいい、そう思ってしまった自分を恥じた。

本当ならば抱きしめて慰めるべきなのかも知れない。でもカリストは動けなかった。

名前を呼んで、抱きしめて、そのまま自分の城につれて帰ればいい。

だがどちらの名前を呼べばいいのかも分からない。

リキアの想いを感じて泣いている彼女の事を思えば、アリアとは呼ばずリキアと呼んで抱きしめるべきだ。

だが、それは出来ない。

彼女は自分の愛するリキアではないから。認める訳にはいかない。いや、どうしても認められない。なぜなら姿だけの偽者……。

そうカリストは思ってからまた自己嫌悪に陥る。ひどい事を考えている。

リキアの器となってしまうたが為になくなってしまったアリアと

言う人間。それなのにリキアとしても認めてもらえず、彷徨っている。

どうしてこんな事になってしまっているのだろう。

リキアもルリアと同じ様な姿になっていいると思っていたのに、なぜこんな風に器と他のものに分かれてしまっているのか。

いや、ルリアは器がないのだから、リキアも器はないはずなのに器だけある。自分に至っては全てがそろっている。

正直まったく分からなかった。なぜ同じ様な状況で分かれた自分たちがこうも違う状況におかれているのか、今までリキアを探す事に囚われて見えてこなかった疑問が浮かび上がってきた。

無言で思考に耽っていたカリストは手を引かれ我に返った。

「……慰めてくれないんだ。冷たいカリ……私が許せない？」泣いていたはずのアリアはそう言っすねたように口を尖らした。

その仕草はまるでリキアで、思い知る。彼女は確かに別人格だけど、リキアの記憶を持っているのだ。

「……………」無言で見つめてくるカリストに向かってアリアは肩をすくめる。

「やっぱり私だけじゃだめみたいですね。どんなに昔の様に振舞っても私には惹かれてくれない。悔しいな」そう言っすカリストの手を離すと背を向ける。

「本当に悔しい。私は私で、でもリキアで。それなのに私一人じゃ何の意味もない。アリアとしてもリキアとしても、意味のない存在……。ねえ、じゃあ私は何？ 何の為にいるの？」カリストから見えないように肩を震わせる。

声も震えていた。きつと瞳も震えているのだろう。

カリストは拳に力を込める。そして今度こそ抱きしめよう、そう思つて手を伸ばしかけた途端第三者の声が乱入した。

「……アリア……その男が……その男を……待つてたのか？」アリアと同じ様な震える頼りない声が横から聞こえてきた。

アリアは弾かれたように顔を上げるとその声の主を見る。そしてその姿を認めると、今にも泣き出しそうにそれでいて少し嬉しそうに苦しそうに相手の名前を口にした。

「リストさん……」

「なんとなく、わかつてたんだ。アリアが俺に答えてくれない理由……。だつて！　だつて……アリア俺の事嫌いじゃなかっただろ？　それなのに……。たまに、どこか遠くの方を見てることがあつて、なんとなくわかつてた。誰か待つてるんじゃないかって……」リストはそう言葉早く言い切ると、アリアに笑いかける。

「よかった、な。迎えに来て貰つて。よかった……よ。うん。それでアリアが幸せになれるなら……よかった」自分に言い聞かせる様に何度も頷き、リストは今度カリストへと向き直る。

「なんか、事情はよく知りませんが、アリアの事迎えに来たんですよね？　アリアの事……し、幸せにしてあげてください！」勢い良く言い切ると、カリストへ頭を下げた。

「リスト！　やめて、やめてよ。お願い、やめて」アリアは頭を下げるリストの所へ飛んで行くと、慌てて頭を上げさせようとする。

「リストさん、お願い……やめて下さい」アリアはリストの両肩を両手で支えながら蚊の鳴くような声で制止する。

「俺、さ。運命とか前世とか…… あんまってか全然信じてないけど、きっとそう言う事なんだろう？」リストは自分の肩に載せられた真っ白で華奢なアリアの両手に自分の両手を重ねる。

そしてそつと自分の肩から外させると、そのまま両手を握り締めた。

その顔は笑っていて、どこかスツキリしているようにも見える。アリアもリストもこの村の出身だ。もちろんお互い両親はまだこの村に住んでいて、二人もこの地から離れて暮らしたことはない。

お互い生まれた時から知っている。幼馴染、いつも一緒にいる。そんな相手がなぜか誰かの迎えを待っているなんてありえない事だとリストはずっと思っていた。

でも自分に答えてはくれないアリア。確実に自分の事を想ってくれていると自惚れではなくわかつているのに、アリアは決して自分の想いを受け入れてはくれなかった。

他に村で男がいる訳じゃなかった。どこか違う町へ遊びに行つて出会った一時の恋人がいるのかも知れないとも思った。

だが、そんな事じゃなかった。もつと違うものだったのだ。

リストは妙に納得してしまった。アリアはきつと特別な存在だったのだ。

自分みたいに冴えない男と違って……。絶世の美女と村で褒められて、町へ遊びに行けば誰もが振り返る。そんなアリアは、やっぱりいい男の隣が似合うんだ。

「俺、さ……。アリアの事絶対忘れないから。当たり前だけど絶対忘れないよ。おじさんもおばさんも忘れない。絶対に忘れたりしないよ」リストはそう力強く言つと、そのままアリアを抱きしめた。

「だから、アリアもさ……。ここの事忘れないでくれよ。おじさんとおばさんの事、俺の事……。忘れたりしないよな？」アリアはリストの胸に顔をうずめると、無言で何度も頷いた。声を押し殺して、何度も何度も頷いた。そしてリストにしがみつく。

「……ありがとう、ありがとうリスト……。本当にありがとう」何度お礼を言っても足りない。嬉しくて嬉しくて涙が溢れて来る。いつもアリアを見てくれるリスト。そしてありのままのアリアを認めてくれる。

どれだけ救われたか分からない。どれだけ嬉しかっただろう。

自分の事を思うと暗く深く沈んでしまうアリアを救い上げてくれたのは、いつも隣にいてくれたリストだった。

素直に純粹にアリアを愛し、認めてくれるリスト。リキアなど関係なくアリアを求めてくる彼。いつも救われていた。そしてやっぱり最後も救ってくれた。

「あり、がとう、あ、りがと、う。……絶、対に忘れ、ませ、ん」しゃくりあげながら何とか言葉にすると、涙に濡れてクシャクシャの顔を上げる。

そしてアリアはリストに向かって微笑むとリストを引き寄せ、自分は背伸びしてそつと唇を重ねた。軽く触れた唇を離すと、アリアは踵を返しカリストへ抱きついた。

「連れていって！」そうアリアが叫ぶと同時に、二人の姿は消えていた。

その場には呆然としたリストだけが残されていて。リストはそつと自分の唇に触れるとそのまま崩れる様に座り込む。

そして雄叫びを上げながら泣き出した。声が枯れるほど、涙が枯れるほど、永遠と思えるほどリストは泣き叫び続けた。

深い森の中には一人の男の切なすぎる泣き叫ぶ声だけが響いていた。

Fantasy ? (後書き)

後一話でFantasy終了です。
リストさん退場です。

アリアの言葉使いがグチャグチャなのはアリアとリキアが混在してしまっている為と思ってください。

Fantasy ? (前書き)

1ヶ月以上開いてしまってますいせん。

体調が悪くパソコンの前に座っているのがちょっとつらいのですが、少し落ち着いたので、どうにか進めたいです。

Fantasy最後ですが、なんだか説明臭くなってしまいました。ちよつと短いそして暗い……。

Fantasy ?

暗い城の中、今は二人の男女しかない。

カリストはいつもの様に椅子に座り、ルリアはいつもとは違ってカリストの正面に立っていた。

『泣きつかれて寝たわ……』

「……そう、か……」

『……それで？……』言葉少なくルリアは腕を組んだまま顎をしゃくる。

「……」カリストはその態度を受けて顔を伏せる。堂々と椅子に座っていたわりにその姿はなぜか小さく見える。

『だんまりはやめて。アリアはどこ？』

「……眠りについた」

『それはユリとは違う意味の眠り？』ルリアがそう言うとカリストは無言で手を上げる。

するとどこからか大きな球体の物体が宙に現れる。それはまるでシャボン玉の様に重さを感じず浮かんでいる。

そしてその中に膝を抱え小さく座った状態のアリアがいた。その瞳は閉じられている。

「……本人の意思だ」ルリアが言うより早くカリストは言う、再びアリアをどこかに消す。

『……言い訳がましいこと。アリアは遠慮したんでしょ。私たちの前にまだアリア状態の自分がいることに』

「……………」

『ユリの様子を見てくるわ』反論もしてこないカリストに憎々しげな視線を投げると、そのまま踵を返す。カリストは出て行ったルリアの方へ視線を送りながらついたため息が漏れた。

アリアの説明は正直的を得なかった。本人が分かることだけだった為なのか、自分がリキアの器として存在している事。リキアの記憶を持っている事。自分と同じ様な人が後二人いると言う事の三点しか分からなかったのだ。

自分が器と言う以上、他の二人も何かしらの役目を負っている事は確かなのだが、それが何かはアリアも知らなかった。

だがアリアは他の二人の事は会えば分かると言っていた。そしてその二人も自分と同じ様に記憶を持っているはずだ(・・・)とも言っていた。

だがそれ以上の事をアリアは沈黙した。その理由はカリストもルリアもなんとなく分かっていた。

そしてその事に二人とも敢えて聞き出そうとはしなかった。いや、正確には詳しく聞く事に躊躇いがあったのだ。

カリストはついまたため息をつく。アリアの話はいまいち的を得なかったとは言え、今まで見えなかった部分が少し見えるようになった。

自分の不可解な気持ちにもしっかりと理由がついた気がする。

だが心が晴れ渡ったとはとても言えなかった。それ所か余計な感情が芽生えてしまい苦しい……。

いつかは訪れると分かっていた別れが、自分の思っていたものとはまったく違う別れになってしまう事に隠し切れない衝撃を受けてしまっている。

「……どうかしてる」独白するが、それに反応してくれる相手は誰もいなかった。

アリアは自分から意識を遮断して眠りにつきたいと言って来た。ルリアの言う通りカリストやルリアに遠慮している部分はあると思う。カリストはアリアをリキアと認められないようにルリアもきつと認められないだろう。

器がりキアでも中身はやはりアリアなのだ。その状態で傍にいられても正直苦しむのは目に見えていた。

きつと冷たい態度を取ってしまう。そしてそうなたら自分達以上に苦しむのはアリアだ。

リキアとしてもアリアとしても受け入れて貰えない状態に耐えられるだけの気力が今はなかったのだろう。

それがわかっていたからアリアが眠りたいと言った時、反対もせずすぐに優しくて温かい眠りへと誘ってやった。

ルリアもその経緯は分かっているだろうに、それでもカリストに対する風当たりが強かった。

カリストとしては心の違うリキアは認められないがルリアは違うのだろうか。

リキアを女性として愛している自分と、妹として愛しているルリア。包容力が違うのか。

例えるなら記憶を失った相手に対して自分はきつと悲しんで嘆いて暮れて力がなくなってしまうかも知れない。

だがルリアはきつとそんな状態の彼女を守ろうと心を強く持って接するのだろう。悲しみは横に置いておいて、彼女を甲斐甲斐しく

世話するに違いない。

そこまで考えてカリストは笑った。馬鹿らしい。その違いは愛の違いなどではない。きつと人の違いなのだ。ルリアは自分とは違って本当はやっぱりとて優しいのだ。

自分の愛したりキアと同じ様に強くて優しい。そしてユリとも同じ様に……。

そう瞑目してカリストは首を振る。色々な事を考えるべきではないかも知れない。たまには昔のように思いのまま突っ走るべきなのかも知れない。

だが、そうは思ってもカリストは動けなかった。新しく増えた悩みに囚われ思考が同じ所を巡りまっただ動いてはくれなかった。

カリストは何度目が分からないため息をつくと遠くの部屋に気持ちを抱く。

眠っているだろう彼女を思ってカリストはまたため息をついた。

Fantasy ? (後書き)

中途半端ですが、これでFantasyは終了です。
次は続けて新章と思っていましたが、もしかしたら間奏曲(Int
ermzzo)を入れてしまうかも知れません。

Intermezzo ? A Solo Scene ? (前書き)

ユリの独白。

前話で大分明らかになったとは言え、今回かなりのネタバレを含みます。

気になる方は間奏曲 (Intermezzo) 全話飛ばしてください。

気にしないという方はお進みください。

I n t e r m e z z o ? A S o l o S c e n e ?

前よりもずっと、重い空気が流れている。

私は自室で膝を抱えうずくまる。

今日は暇をもらった。

本当なら出かけるけど、出かけたくなかった。

ちゃんと外の空気を吸わないといけないけど、今日はどこにも行きたくない。

もうわかってる。

二人が何も言わなくてもわかってる。

記憶は全然ないけど、想いは確かに感じていて、今なら素直に二人のそばにいて嬉しいって思える。

でも、でもでもやっぱり苦しいよ。

私は一体何？ なぜ存在しているの？

アリアも、ずっとこんな気持ちで苦しんだのかな……。

私のこの気持ちは、存在は偽りのもの？

私のこの想いは、苦しみは必要ないもの？

自分がどうしたいのかもわからない。
どうしたらいいのかもわからない。

何も何も分らない。

でも、一つだけ分かつてる。

一つだけ、絶対に間違えない気持ち。

二人の事が大好きで大切に……ずっと傍にいたいって気持ち。

私のものなのか、あの方のものなのか分らないけど、その気持ち
は絶対で……たぶん、私とあの方の同じ気持ちなんだと思う。

I n t e r m e z z o ? A S o l o S c e n e ? (後書き)

なんとなく自分の立ち位置を理解したユリです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455n/>

冥界

2011年11月24日12時03分発行